

子ノ顔モ否不見テ死ナマシ、極キ弓箭兵仗ヲ持テ、千人ノ軍防グトモ更ニ益不有ジ、何況ヤ狹キ船ノ内ニテハ、太刀刀ヲ拔テ向會フトモ、然許彼レガ力ノ強ク足ノ早カラムニハ、何態ヲ可爲キゾト各云合テ、肝心モウセテ、船漕グ空モ无クテナム、鎮西ニハ返リ來タリケル、各妻子ニ此ノ事ヲ語テ、奇異キ命ヲ生テ返タルコトヲナム喜ビケル、外ノ人モ此レヲ聞テ、極クナム恐テ怖レケル、此レヲ思フニ、鱈モ海ノ中ニテハ猛ク賢キ者ナレバ、虎ノ海ニ落入タリケルヲ、足ヲバ咋切テケル也、其レニ由无ク尙虎ヲ咋ハムトテ、陸近ク來テ命ヲ失ナフ也、然レバ万ノコト皆此レガ如ク也、此レヲ聞テ餘リノ事可止シ、只吉キ程ニテ可有キ也ト、人語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語 十二〕いまはむかし、壹岐守家行が、郎等等を、はかなきことによりて、主のころさんとしければ、小舟にのりてにげて新羅國へわたりて、かくれてゐたりけるほどに、新羅のきんかといふところの、いみじうの、しりさはぐ、なにごとごと、へば、とらのこうに入て、人をくらふ也といふ、この男とふ、虎はいくつばかりあるぞと、たゞ一あるが、にはかにいできて、人をくらひて、逃ていき／＼するなりといふをき、て、この男のいふやう、あの虎に合て一矢を射てしなばや、とらかしこくばともにこそしなめ、たゞむなしうはいかでかくらはれむ、此國の人は兵の道わろきにこそはあれといひけるを、人き、て國の守にかう／＼の事をこそ、此日本人申せといひければ、かしこき事かな、よべといへば、人きてめしありといへば、まいりぬ○申 おのこ申やう、さてもいづくに候ぞ、人をばいかやうにてくひ侍るぞと申せば、守のいはく、いかなるおりにかあるらん、こうの中に入きて、人ひとりを頭をくらひて、かたにうちかけて去なりと、この男申やう、さてもいかにしてかくひ候と、へば、人のいふやう、とらはまづ人をくはんとては、ねこのねすみをうかゞふやうにひれふして、しばしばかりありて、大口をあきてとびか、り、頭をくひてかたにうちかけてはしりさるといふ、とてもかくてもさばれ一矢射てこそはくらはれ侍ら